



筑紫女学園大学リポジット

Research on the Problem of Modernization in Chinese Minority Groups: Focusing on the Yunnan and Sichuan Provinces

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2021-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1042

中国少数民族における現代化問題の研究 ～雲南、四川地域を中心として～

石 其 琳

Research on the Problem of Modernization in Chinese Minority Groups :
Focusing on the Yunnan and Sichuan Provinces

Kilin SEKI

前 言

本論は2019年の8月より9月の間に中国雲南、四川地域の少数民族の現代化についてのフィールド調査研究である。地域的には、新たに四川省の地域のほかに、すでに十数年前に調査した雲南省納西（ナシ）族のモソ人居住地区、有名な観光地にもなっている泸沽湖（ルグ湖）を含めたものである。

今回の調査ルートは、まずナシ族居住地区の麗江市から、ルグ湖周辺地区の調査を行い、それから北へ移動しながら甘孜藏族自治州と阿坝藏族、羌族自治州区内調査を行ったのである。全程約2000キロ以上で、山道が多く、海拔2500メートルから4600メートル以上の地域である。途中では高山、草原、溪流、湿原、峡谷、盆地など青藏高原東部地区を縦断しながらの広域の調査であった。

中国は1978年より改革開放の経済政策を実施し始め、1982年からまず地域限定の扶貧計画が実施、計画かつ組織的大規模の開発が始まったのである。1986年国務院貧困地区開発領導小組を成立させ、1993年国務院扶貧開発領導小組と名称が変更された。具体的に貧困県を画定し、扶貧基準を決め、財政專項扶貧資金を設立したのである。1994年「国家八七扶貧攻堅計画」を頒布実施し、更に2001年と2011年に二回「十年農村扶貧開発綱要」を頒布実施することになった。

改革開放政策実施以来、この扶貧開発政策は、政治、経済、社会、文化を基盤に政府の指導と協調、支持を受けながら、貧困地区、貧困人口自身は、国家提供の改革と発展収益能力及び自身の収入、福祉能力の実施過程を通じて、参入できる能力を高め、努力するのである。貧困地区といえ、中国の国土面積は広く、辺遠の地区には、多く少数民族が居住している。よってこの

扶貧、開発政策の対象は、少数民族居住地域を多く含めるのが現状である。

筆者は今回調査する一部分の地域に対し、すでに2004年、2005年に現地でフィールドワーク調査したことがある、当地区では十数年後における再調査である。現地において、外面的変化が多くみられると同時に、社会全体が現代化へ進む中、内面的に新たな問題意識も顕著化され、変化とともに進化しつつある。少数民族地域の現代化は、扶貧する実質的な政策との連携は欠かせないのである。よって彼らは、自分たちの生活改善のため、自身の意識の変化と努力も要求され、適応しながら対応していかなければならない。そして現代化進行過程において、彼らは生活の変化を実感しながら問題に対応し、目標実現へと向かうのである。

本論は調査中具体的な事例を取りあげながら、問題点を考察する。地域は、主に再調査地区麗江市ルグ湖周辺の変化と問題、そして高山草原地区の甘孜藏族自治州と阿坝藏族羌族自治州区内牧民の現代化について章を分け、それぞれの生活実態と問題点を取りあげる。政府の現代化と脱貧困政策の下で、多方面において、それぞれ地域住民意識の変化が多くみられるなか、伝統文化との葛藤は避けられない現実がみえる。また現代化へ進める中、実生活と関連する産業化による市場参入の実態についての問題点を考える。その実態を明らかにするため、現地の写真を使用しながら考察する。なお本論で使用する写真は、全て筆者が現地で撮影したものである。

中国は少数民族が多く、数個の大きい特定民族自治区以外、基本的に各民族の混住状況は全国各地に散在している。中でも特に雲南省、四川省は、歴史背景と地理的理由により、多数の民族が共住する地区である。各民族の形成には異なる長い歴史的、自然的背景要素が存在するのだが、長期に渡って共生する現実より、互いの文化に影響をうけながら、各自の伝統文化をきづいたのである。以下は、まず雲南省ナシ族モソ人のルグ湖の現代化実態と問題点を考察する。

I 雲南省ルグ湖観光産業の発展について

雲南省ナシ族モソ人について、筆者は既に十数年前の研究調査により、その民族の歴史、文化伝統の特徴、そして現代化する上で欠かせない観光産業などに関わる問題点を論文（注1）で触れたので、今回はその部分を省略する。同地区の十数年後の再調査にあたって、中国全体の現代化への進行にともない、様々な政策が大きく影響するため、多方面に顕著な変化が生活意識に見られ、反映されているのは言うまでもないが、今回はその後の観光産業、特にモソ人の伝統文化伝承が産業化する際に生じた問題について注目する。

（一）環境と生態保護の問題

泸沽（ルグ）湖は雲南省と四川省が交差するところに位置し、四川省と雲南省の共同管理になっている。7つの民族、彝（イ）族、汉族、ナシ族、チベット族、プミ族、白（バー）族、壮（チワン）族が共住しているが、住民が最も多いのはナシ族のモソ人である。ナシ族のモソ語によれば、「泸」は山溝で、「沽」は里で、山溝にある湖の意味である。湖面海拔2685mであるため、湖の周辺は

高山に囲まれ、年に三ヶ月以上の積雪期があり、森林資源が豊富である。湖水庫容量22.52億m³、現地のモソ人には、その湖が「母親湖」と呼ばれている。彼らにとって長い歴史の間、自分たちの生活基盤でかつ大切な故郷であり、この湖は彼らの命の源ということである。

この風光明媚なルグ湖地区に、昔から住民大半のモソ人が持つ「走婚」の伝統的生活習慣があるため、これは人類学関連の研究対象であり、その特色ある文化現象は、伝説的な観光テーマにもなったのである。1986年雲南省はルグ湖を省級自然保護区として認定した。さらに1988年8月ルグ湖は中华人民共和国国務院に第二回国家重点風景名勝区として認定された。また1993年四川省より省級観光名所区に認定され、1994年雲南省からも省級観光旅游区と認定されたのである。現在では観光産業の発達にともない、全国はもとより海外からも観光者が大勢寄せ集まっている。

観光者が多いため、前回調査した時にもすでに宿泊の需要が高い現象が起こっていた。以来、民泊が増加し、商業販売業の参入も目白押しに盛んであり、生活の多方面において、便利さが増えるとともに、そこでもたらされた多様な問題も発生しつつある状況になっている。現代化において、生活を改善させながら貧困からの脱出が目標であるのは当然だが、反面有名な観光地になれば、訪れる観光客も増加し、そこに伴う現地の文化、環境、生態の破壊が生じはじめた。いわゆる「観光公害」問題が顕著化されている。

1986年から、すでに雲南省人民政府はルグ湖が自然生態保護区として建設することを決定している。その後の政府はまず2013年18回三中全会に《中共中央に関する全面深化改革若干重大問題の決定》を行い、人民福祉に関わる民族未来の深刻な変革意識改革が始まったのである。2015年、習近平国家主席が雲南省の調査研究において、生態環境保護について強調し、「生態立省、環境優先」戦略が決定された。雲南省環境保護庁と麗江市、寧蒗県人民政府は、2015年11月からルグ湖環境保護と治理のため、実地調査研究と専門テーマ研究を行い、寧蒗県に予防、保護、防止を総合的思考から、《ルグ湖流域控制性環境総体計画》を編成し、具体的に管理を進めると要求したのである。特にルグ湖の水が高水質に維持保護できる点を重要視している。この計画をもとに、この地域では「緑水青山は金山銀山なり」の看板スローガンが現地では随所にみられる。そして《麗江市宁蒗县泸沽湖流域控制性环境总体规划》という環境保護計画が企画され、2016年から2030年までと設定、進行には三段階に分けられ、近期では2016年から2020年、中期では2021年から2025年、遠期では2026年から2030年と定めている。

計画の重点として、城郷の発展で発生する環境問題は、観光産業の突進で、民泊増加、村民の生活ゴミの汚染、畜禽養殖汚染、農業関連汚染、さらに生活污水の汚染などが深刻になって行く。それに対し、ルグ湖の水質を保護するためには、湖岸への建物接近の制限距離を確保することを考えたのである。その内容は、(1)湖岸から一级管控ラインは、ルグ湖湖岸最高水位線(2690.8米)を基点から外延80米を離れる距離である。(2)湖岸から二级管理ラインは、ルグ湖一级管理制限ラインよりさらに外延100米距離と決める。ほかに村ゴミ収集点設置の計画、統一収集後に無公害処理する。観光の一環として、「農家生活の体験」項目が増えている中、生態観光農業を積極的に発展させ、農業を化学肥料使用の減少で農薬による水質汚染防止の方策をとったのである。

この一連の政府による保護政策の実行により、今回の現地調査において、前回の状況と比較すれば、外面的だけにとどまらず、特に交通の面において顕著な変化と改善の実態が見られている。それに関連する問題点について、具体例を挙げて述べていく。

(二) 観光産業における管理と問題点

ルグ湖は本来少数民族の居住する村地区であり、出入りに関しては、昔ながら村人たちは湖を利用して往來するのであった。陸で外部との交通は、およそ昔ながらの茶馬古道を利用していた。その後、長年利用された道路を整備しながら自由に往來するのである。現在すでにアスファルト舗装された道路が通行され、各地への交通時間が短縮されたのである。

現代化政策を進める中、道路の整備が整えられ、さらに2015年10月ルグ湖の空港通航以来、車での流通量のほかに、大都市から飛行機での出入りも拡大され、観光旅行産業発展の好条件になった。観光客を運ぶ交通機関と旅行産業の隆盛で、現地へ観光者数が増えると、必ず避けられないのは環境保護の問題である。前回の調査時には、すでに問題が顕著化した、特に湖岸と周辺地区に大量のゴミ発生に起因する水質汚染問題が懸念されたのである。

当時から、政府側すでに毎日の観光客人数の制限など政策の実施を考えたが、2019年8月6日雲南麗江ルグ湖風景名勝区管理局發布游客収容量警告で観光ピーク時の観光客の流量規制と应急管理機制が「泸沽湖景区旅游高峰期客流控制と应急管理暫定方案」(注2)に提示する内容により、ルグ湖風景区の可能観光客人数は一日最多12000人であり、最大観光客収容可能人数は一日25000人で管理している。旅行者のルグ湖進入人数を管理するため、新たに個人客と車の入場券の発行を共にそれぞれの出入り口を設置し、進入人数管理ができるようにしたのである(写真1)。雲南省人民政府の資料(注3)によれば、2017年政府機関と民間航空会社の協力と広報により、観光人数が百万人を超え、年度報告によれば、入場料の収入が1億人民幣(2020年現在日本円約15億円)を突破したのである。この莫大な収入は、今後の地域の発展がより優質な現代化へすすみ、当地に強力的産業推進と脱貧困に助成するのである。毎年の入場料収入の中から200万元「ルグ湖摩梭(モソ)文化保護基金」が設立され、モソ大家族とモソ人伝承、創業に対し支援するのである。例えば舞踊団に数十名の若い男女隊員に対し、昼間は仕事して、夜間は観光項目関連の

舞踊を担当する場合、月に数千元の収入が得られるのである。

現代化にあたって、生活の改善から脱貧困へ目標達成をするうえ、少数民族自身が様々な問題に直面せねばならないのである。次章は、現代化とともに伝統文化への保存と展開について、より複雑な社会、経済に関わる困難な背景要因と問題を取りあげる。



(写真1) 泸沽湖の入口

Ⅱ 民族伝統文化の保存と展開

中国56の民族の中、モソ族という族名はないが、新中国成立後、少数民族の認定過程に雲南ルグ湖岸に住むモソ人はナシ族の一支と認定された。モソ人は自分の母語があるが文字はないので、ダバ文化を持ち、チベット仏教を信仰している。モソ人は現在中国現存の母系社会意識を持つ民族で、走婚（通い婚）習慣を保存している。ルグ湖は、高原湖の綺麗な景色と居住者モソ人の母系民族文化があることで、特色ある自然景観と人文景観で観光名所になったのである。

前回の調査中に、モソ人の伝統である走婚習慣が外部から「奇俗」として、偏見的なまなざしと誤解を招くことで、差別的問題が生じることに對し、村人から自分たちの伝統文化をより正確に伝え理解されるように、自ら博物館の建設を行ったのである。この点に関して、上述した筆者の論文ですでに論じたので、ここでは省略するが、それに関連して、今回はもう一つ重要な伝統文化に関わる問題を取りあげる。

雲南ルグ湖は、別名「娘の国」である、これは母系社会制度家庭形式の習慣が続くモソ人に対するの俗称である。「走婚」の風俗は、長い年月を経てモソ族が続けてきたが、現在は新たな政府法の政策の下で、ほぼ現代化され、普通の婚姻制度に沿って生活しているのが一般的である。しかし家族の中において、やはり女性に対し、従来持つ特別女権意識からして、崇高な地位がある事実は否定できない。現に娘によって家が継がれていくことも潜在的に肯定されている風習があり、多方面の理由においても、なるべく娘は実家を離れないことが考慮されるのである。今回のフィールド調査中に、現地の女性も実家を守る使命があると思い、自分の婚姻問題で葛藤しながら悩んでいる事例がみられた。これがルグ湖における今の現実であることは知る必要があり、日常社会生活の営みにおいて、その意識が潜在存在していることが無視できないのである。

モソ人は、自分の伝統文化を古よりとても重視しているし、またこれら伝統の習慣と活動が彼らの人生であり、生活そのものである。この信念がその伝統文化に新たな形で展開したいという意識を鼓動したのである。伝統文化を現代化の波に乗せ、如何に継続させ、自分たちの生活活動として、退化せずに長く伝承していかなければならないと考えている。今回はこの点について特に注目し、前回調査より現地少数民族の知人の事例を通じて考察する。

（一）モソ手織り伝統工芸の伝承

ルグ湖より約20キロ離れたところに、雲南麗江市寧蒗県永寧郷瓦拉比村（ワラビ村）があり、そこは永寧鎮北10キロに離れての温泉村である。現在この地にあるモソ人の女性阿七独支瑪氏（漢名は楊立新）によって、その自宅にモソ族の伝統工芸手織り工場を作り、彼女は工場長を務めている。この楊さんは前回調査からの知人であり、2005年10月15日麗江市人民政府により「阿其・独芝」と命名され、「ナシ族（モソ人）民族民間工芸传承人」と認定され、また2007年雲南省文化庁雲南省民族委員会から「雲南省非物質文化遺産传承人」（注4）と認定されたのである。2011年国連の開発企画援助機関から伝統文化の認定により援助を受けることになった。この伝統工芸が

これらの成果を得られたのは、当然公的援助があつての結果であるが、楊さんのように少数民族自身の強い意識と熱意がなければできなかったであろう。また実際その伝統文化を市場へ産業化させて定着できることの難しさも楊さんの事例から伺え知れる。

この伝統手織工芸文化の保存ができた背景には、ルグ湖のモソ族の女性たちが幼少より、麻、毛糸と綿を材料に帯、ショール、毛布など様々な織物を作る手芸を身につけなければならない習慣と深く関係している。そして上述した楊氏自身の信念と奮闘があつてこそ繋がった結果である。

昔から、ワラビ村のモソ人たちの生業形態は、採集耕作、家畜飼養を営んで、限られた収入で生計を立てている。同時に女性たちは簡易な織り機で麻と綿を材料に手織りした製品が少々家計の助けになったのだが、文化大革命時期以後1980年代以来、従事する人が少なくなり、この技術が失伝する危機にあつた。楊氏は村の最初の中卒者であつたが、進学または出稼ぎにいけば、生活の面から見て、将来性を考えると同時に、地元である家を離れなければならない現実がある。モソ人の伝統習俗から、自分が娘で家を守る責任があるため、村にとどまることに決めたのであつた。

当初祖母から学んだ手織り技術は、様々な織物を産出していた。後にルグ湖の観光産業の開発とともに、2003年外地の経営者から、かつて茶馬古道の要地で栄えた観光名所束河古鎮の工芸品商店で手織り実演販売した物が、民族工芸品として注目され、大量に売れるようになった。ここで楊氏は、自分たちの伝統工芸にも価値があることを信じ、その伝統文化を継続させなければならないと決めた。また伝統工芸を保存すると同時に、村人の生活改善でき得る新たな道であろうと考え、地元に戻り、手織り工場を開設した。商品の売れ行きが良かったことで、2006年婦聯会の助成のもと、村唯一の企業「モソ伝統手織り紡織工場」を作り、寧蒗県工商局で正式に登録手続きを行ったのである。その後ルグ湖モソ文化研究会の協力のもと、モソ手織り工芸文化展示



(写真2) モソ非遗博物館

できる「摩梭（モソ）非遗博物館」（写真2）、織り工場、モソ人の様々な伝統文物、食文化関連の製品も含め展示販売できる場所を建て、楊氏が居住管理している。筆者が前回調査する期間、楊氏の自宅に滞在したのだが、調査研究者にとって滞在に不便である宿泊実態に対し、現在はこの博物館に民泊の設備も整えたのである。

(二) 民族伝統工芸の産業化とその展開

さて、伝統文化の伝承がただ博物館での展示項目だけにならないためには、商品化して市場に流通させる方法があるが、市場に継続定着させなければ、産業は成立しないのである。楊氏の織物に関しても、実際に市場参入するにあたって、いくつもの大きな壁を越え、産業として定着し

続けなければならない厳しい現実問題にぶつかったのだ。この実態は現代化する上で、多くの少数民族地域が直面する現実問題であり、それぞれの事情により解決しなければならない問題でもある。以下モソ族の手織り工芸の例を述べよう。

当初楊氏が工場を始めた際、一人の生産では市場への供給が間に合わず、10人増員して、技術を教え拡大していった。温泉村68戸168名の婦女が従事し、そしてモソ人だけに限らず、近辺の多民族村からも従事する婦女が増え、山奥の女性就業問題に役立ったのである。多くの織物の商品が注目され、2006年公的機関からの助成によって、村中に個別に商品の生産が乱発し始めた時期があって、商品の品質管理も乱れ、個人業者間の市場争奪、価額競争による悪性競争が起こった。さらに大量生産した質の悪い偽物も市場に流入して、商品の品質に対し不信が生じ、価値が下がり、販売現場に混乱と危機が起こったのだ。これは一般に商品の産業化販売する上でよく起こる悪現象であるとはいえ、山奥にある少数民族の手織り伝統工芸が、現代化の波に、工業技術の進歩と大きな販売市場の競争に対し、自分たちの文化価値を掲げた商品が対抗して、安定的流通販売できることは、そう簡単にできることではない。その状況に対し、改善しなければ、商品の不振とともに、モソ人の伝統文化の存在意味と価値がなくなってしまうのである。

楊氏は、品質管理が統一できるよう、合作社の経営方式に変え、多くの現地婦女個人織り者に参加するよう努力している。商品の文化保存価値を確立させるため、2008年モソ人の母系大家族



(写真3) 麗江市モソ族手織品専売店

族の重要な人物である祖母が普段身に着ける「カギ」の形を採って、製品の商標「阿七独支瑪」の名称として正式に登録し、偽物の流通防止と品質管理ができる対策を取ったのである。現在商品の種類も増やし、必ずこの登録された商標を織り込んで、商品の品質を保証している。そのほかに、1997年世界遺産に登録された観光で人気ある麗江市に「ルグ湖モソ人伝統手芸紡織品専売店」を開設し、製品の販売ルート进行管理している。また専売店(写真3)に製品の商標祖母の「カギ」の形が店の看板に標記している。

山奥に住む少数民族の脱貧困には、現代化政策の実施が重要である。しかし彼ら自身の伝統文化を現代化産業開発の資源に成功できる例は、そう多くないのである。上述してきたモソ人の例を見れば、伝統織り工芸とはいえ、特別な贅沢品ではない日常生活用品に過ぎない布織物の生産販売は、商品が市場へ参入し、十分な品質保証だけでは、同種類廉価での大量生産品と競争はできない。また商品に対し、顧客は現地旅行時の思い出とモソ人に対する特別な感懐と認識がなければ、あえて購入しないであろう。ここで商品にプレミアム価値を加えるため、2012年末、モソ人の伝統の十二個の民族トーテム(totem)を完成させ、商標として登録したのである。これらのトーテムを多くの商品に付け加え、例えば日用品のショール、またはスカート(写真4)にそのトーテムを織り込んでいる。日常品として使いながら、民族伝統文化の保存したい思いを伝え、自民族



(写真4) 伝統スカートにモソトーテム符号が織り込んである

文化の重みを商品価値に加えたのである。時代の進展に伴い、現在すでに最新販売方法のネット販売も始まり市場を拡大している。調査中、楊氏はいま収支の決済が中国全国共通の「支付宝」と「微信」(注5)のキャッシュレスシステムを使って、煩雑な手間が省けるだけではなく、さらに安心と信頼が高まり、経営管理が一層便利になったと語ってくれたのである。

これまでモソ人の伝統工芸の伝承と産業化への展開について述べたが、いくら伝統文化の価値が公的に認定されたとはいえ、それを持続させ、生業の活動として生かし実業化するには、多大な困難を克服しなければならない現実問題がある。さらに楊氏のような強い信念と多大な努力がなければ、この現代化事業を展開し続けることはできないであろう。

以下は、今回の調査中、モソ族地区と異なる地域の現代化について、事例を取りあげながら伝統文化と関わる問題を考える。

Ⅲ 民族伝統文化と現代化の関わり

今回は雲南省ルグ湖から北の四川省へ移動し、途中稻城、亞丁、理塘、雅江、瀘定、康定まで「甘孜藏族自治州」に滞在し、さらに成都より北西の汶川周辺までの「阿坝藏族羌族自治州」地域にフィールド調査を行ったのである。二つ自治州面積約23万km²あまり広大な地域は、チベット族を主に、多民族が共住する地区である。

長年多くの分野で現代化が進んでいるが、今回注目するのは地域の自然生態保護と農牧産業の推進である。広大面積の自然生態区域は、林業など多く資源の宝庫と同時に重要な観光産業の資源にもなる。政府の発表では、2018年甘孜州の観光人口数は2230万で、阿坝州は2369万人超過している。以下自治区の自然生態と人文歴史背景を触れながら、地域の現代化の実態と問題点を考察する。

(一) 甘孜・阿坝チベット族自治州の自然生態と人文背景

甘孜自治州は、四川省西部、チベット高原東南側に位置している。古い時代から人が居住し始め、漢代(BC221)には既に関係し始めて以来、1939年西康省が設置されたのだが、1950年西康省チベット自治区を設置、1955年それを廃止し「四川甘孜藏族自治州」に改設され康定県が市になり、現在の管轄区域になったのである。地形は、海拔6000mの山が五つ、5000m以上の山は200座ある。全州の七割以上が高山であるため、気候の垂直分布により、動植物の種類が繁多である。この自然条件が全州の生活形態と関連すると同時に、現代化へ産業展開の資源になるのである。

阿坝州は四川省西北部に位置し、甘孜州と隣接している。戦国時代秦国によって（BC316）建制され、長い歴史中、数度改名されたが、1987年「阿坝チベット族羌族自治州」と更名され、四川省第二大チベット族居住地区と主な羌族集住地域である。地理的には、チベット高原東南側にあり、地形は高原と高山峡谷が多く、海拔の高度と気候の変化は甘孜地区と同様である。両自治州現代化産業資源の特徴は、共に旅行業、水資源、自然生態と鉱業が優勢である。中には世界自然遺産資源として、有名な「九寨溝」、「黄龍」のほか、パンダの故郷と保護地区など世界級の観光名所が多くある。甘孜州では、「亜丁自然保護区」、海拔2850 m「海螺溝」にある中国最高（1080m）大（最大幅1100m）の氷滝川など、自然生態の観光名所が多く存在する。歴史人文資源において、「康定情歌」で膾炙人口の「康定」は、古来茶馬古道中心地として風情ある名所である。また瀘定県において、清朝康熙時代（1662年～1722年）川蔵地区経済文化交流のために作った瀘定吊橋のほかに、県内にある摩西古鎮にフランス伝教師が1922年建てた中西風格のカトリック教会（写真5）の遺跡があり、この地区の多元的歴史文化価値を示唆し高めたのである。



（写真5）摩西鎮にある中西風のカトリック教会

両自治州は、自然生態と同時に、歴史の関わりが長い故に、関連遺跡が多く存在するのと同時に、独特なチベット族、羌族の風情、更に神秘的チベット佛教文化も特色に加え、観光産業は州の主要産業の一つとして展開するには、生態環境保護問題が避けられないのである。

今回亜丁地区を含め、多くの自然生態保護観光地は、大都市と通航する空港が建設されたことで、観光者数が大幅増加している。入区人数が増えると環境破壊の問題が生じて、様々な環境破壊防止政策も取り入れている。例えば十数年前、すでに自然生態保護観光地で実施した車両進入制限、移動は区内限定の電気自動車を使用する規則を実施している。さらに高地下水汚染を防止するため、最も困難なトイレの問題を解決するにあたり、2018年11月19日連携ある第6回国連世界トイレ会議で、亜丁地区は《中国旅游風景区“トイレ革命”培訓基地》（注6）と認定された。環境衛生の建設、管理、維持と産業連携でトイレ改革を推進し、世界新技術で開発したトイレ設備を使用している。既存の自然生態と人文歴史的資源を維持しながら、現代化により先進的な理念意識と技術を取り込み、伝統文化を伝承展開すると同時に、環境保護と管理を進めなければならないのである。

（二）農牧業の展開と産業化

両自治州に重要な観光産業の一環として、各観光地に共通して掲げた特産品には多数の現地生産の農産物が販売されている。その広大な面積の草地に、ヤクの群れを随所で多く目にする光景



(写真6) 広大な草地に黒いヤク群が随所に見られる



(写真7) ヤク干し肉を売っている看板

(写真6)に関連して、各地で欠かさず売り出される特産品には、ヤク（牦牛）肉関連の製品である（写真7）。

阿坝州の地形と気候の条件から、優質な天然草場を422万ヘクタール保有している。全国五大牧区の一つ「西北牧区」内の重要な地区を占め、生態農牧業が地域にとって重要な産業である。甘孜自治州は、歴史、自然、地理と社会の現実状況の背景を理由に、長年にわたり深度貧困の地域であるが、阿坝州同様世界の最も重要なヤク養殖地区の一つである。だが、昔ながらの飼養法が小群飼育で、無秩序に自由交配させた近親繁殖の結果、品種が退化してしまい、さらに牧草が季節によって不足する実態から、ヤクが栄養不調になり、

結局有利な生活資源にならず貧困に陥ったのである。実際このような状況は、普遍にチベット族居住区域にみられる現実である。そこで政府の扶貧政策として、ヤクの飼育に関して、草場の管理と飼育方法を科学的技術の改善、市場と産業化へ取り込む対策を提示し、改善へ進めたのである。例えば、昔ヤクの放牧で体重250キロになるため6年かかるのだが、科学養殖で飼養法を改善すると、3才未満の子牛は5ヶ月以内でその体重に成長できる。肉質が良くなるだけでなく、牧草場の環境改善のほかに、牧草資源の節約にもなるとの実施報告がある（注7）。

2016年農村集体産権制度改革政策の開始以来、農村集体経済組織人員、経営管理人員、農村集体経済組織法人を明確化することにより、多くの制度保証が提供されたのである。「四川チベットヤク産業昇級牧民収入増の扶貧政策」の例（注8）で、阿坝州の紅原県牧民の収入源はヤクの飼育と牛乳小売り販売だが、近年では企業、合作社と牧戸を協力経営のモードで発展し、当地の乳企業は6000戸あまりの牧戸と契約して、500人以上の就業問題を解決されて、連携して350万貧困戸が増収できた実例があり、ヤクに関する産業の拡大実態を示唆している。だが、牧業の発展に欠かせない家畜のヤクは、牧民と長く生きる生活の友であるため、現代化へ進むうえで、伝統文化理念に関わる問題も潜に存在するのである。以下はこの点について理解するために、研究資料（注9）をもとに、まずヤクの生態と物種文化について述べる。

（三）ヤクの物種文化と伝統について

ヤクは広大なチベット族自治区地域にとって、重要不可欠な家畜資源である。ヤクに対して

の信仰は、祭祀、慶事などの活動と意識は、生活のあらゆるところに存在している。

まず物種について見よう。ヤクは海拔3000m以上で生活できる人類以外の哺乳動物であり、世界でヤクの品種と数量95%の生産量が中国チベット地区である。原始種は300万年前、欧亜大陸に生存していたが、地殻変動と気候の変化で中国チベット高原へ移動し、現代ヤクへと進化し、チベット族先住民が最も早く馴化させた数千年の歴史を経た家畜である。住民にとって、ヤクは農耕、運輸、そして乳、毛、燃料（牛糞）など生活必需品の源であり、「雪域の舟」とよばれ、生きるに欠かせない全能家畜である。

1973年中国甘肅省天祝チベット族自治州哈溪鎮に、最初に出土した身丈0.7m腹径0.3 m背高0.51m角長0.4m体重80キロのヤク造形の青銅器が発見された。その造形と冶煉の技術も高く、民族芸術品であると同時に、チベット族の歴史、文化、宗教研究に資する重要な資料である。このヤク青銅器の鑄造及びチベット族の「万物起源」神話から、ヤクに対して、自分たちの生活と密接にしている由縁に、必然的に自族のトーテムだと考えたであろう。ほかに約2900年前の青海省古遺跡から陶製のヤクが発現されたと同時に、ヤクの毛系と縄などのものも発見された。そして1983年同省湟源遺跡から銅製のヤク像（BC900～BC600）が出土している。これら古文物の発見で、遠古からヤクが重要な信仰対象であることが明らかであろう。現在安多チベット族居住区に広く流传する「斯巴（SRID-PA は宇宙、世界の意味）宰牛歌」に、牛を殺し、その体各部位が天地創造に貢献できたことの内容から、チベット族の先民たちは、ヤクを原始のトーテム崇拝物として、長い年月を経て持続してきた事実が明らかである。チベット地区に保留されたヤク題材の原始岩画、殷商時代（BC17～BC1100）青銅器に彫刻された牛頭の紋飾、周王朝（BC1100～BC221）時期の彩陶牛形図案、さらに現在でもチベット族は、屋根に掲げたヤク頭骨などの習俗が伝承されている。

生活の面で、現在チベット族家屋の門、窓と角の所にヤクの頭の図案が多く飾られている。チベット式建築は白、黄と強烈に対比する黒色がよく使用されている。黒がヤクの色と考えられ、特に尊重され、一般に門と窓の枠は黒色を使い、また黒いヤクの角の表象として、悪除けと考えている。実際ヤクの毛色について、黒のほかに、現在半野生の白い稀有種の白ヤクは、甘肅省武威市天祝藏族自治州に存在している。また阿坝州金川県原産の有名な金川多肋ヤクは、体に黒白の混色で、遺伝上完全に独立種で、2011年中国の農業部「実施国家農産品地理標示登記保護」として登録されたのである。

実際現在チベット族自治区の広大な面積の高原地に、多数のヤク飼養の群は、運搬のための飼育の数が少なく、ほぼ食肉産業の家畜である。世界における多くの研究文献から、家畜ヤクは中国が原産とされているが、世界各地の化石考証によれば、現存する養殖ヤクと野生ヤクの祖先は同じだと指摘されてる。また文献によれば、中国殷周時代約3000年前には普通の牛と腫牛（Bovidae）交配させたので、現在中国のヤクの血統には、これらの遺伝子を保有しているため、ヤクの毛色は野生ヤクの黒褐色及び在来種の毛色の黒色と黒褐色を受け、黒色ヤクに大多数が占められている。この実態から古来ヤクが黒色であった概念は定着され、神話伝説の主役であるヤクのトーテム崇拝と信仰が、長年深く生活に浸透され、多くの習俗に反映されたのである。

(四) ヤクにおける伝統文化と産業化の問題

ここでヤク産業昇級牧民増収の補助政策を実施するにあたって、その現代化が進む過程で、伝統文化との問題を考えよう。

まず生産環境の問題について、以前から自治州各地では盗採伐、盗獵の事件が多発していた。産業化実施後、利益を争う目的で、自治州での家畜、動物の飼養は、牧戸の無秩序な放牧に加えて、牧民同士の牧草地の争奪が原因で、草場の効能が退化させられたのである。これら諸問題は、生産合作社の計画経営を行った後、一定の面積に、決まった牛の頭数しか飼養しないので、十分な草地を保有することができ、牧民も収入増により、乱獵、乱殺の事象もなくなったのである。だが、チベット族の牧民が肉の産業化に対し、もう一つヤクの伝統トーテム崇拜宗教信仰と関わる問題が存在する。

かつて人間の野生ヤク馴化の歴史は、過酷で長い時間を費やしてきた。野生ヤクは强悍凶暴のため、今でも恐れられている。よって民間ではヤクが存在を神と牛の間に位置させ、部族により、ヤクの後裔と信じ、トーテムとして敬虔に崇拜されている。このような信仰と最も現実的問題に関わるのが彼らの食文化である。チベット族は肉食文化があり、普通に牛、羊を食すのである。しかし当日宰殺のヤクと羊は食せず、さらに肉のバラ売り販売も禁止するのである。その理由は、当日殺した牛はおいしくないと言い、また死後一夜通さないと牛の命が生き続けていると考え、仏教「不殺生」の信仰を犯す罪になるというのである。そしてヤクを殺食する時、牛の頭は食してはいけない。牛頭を屋根に供えなければならない、トーテム動物の体を完全な形に保ち、禁忌を犯さない意志を示すのである。そのほかの部族には、多くのヤクから一頭の「神ヤク」を選出し、山へ放生させ、捕獲禁止することにより、トーテム表象意識を抽象化して、部族が禁忌を犯さないことで、自族民に平安を賜り、守られると考えられている。

原始時代のトーテム禁忌は、人間の自然万物に対する畏懼心理によって厳しくまもられてる。トーテム代表の動物に対して、捕獲、殺生、傷害、接触と使用禁止であり、さらにトーテムの名前を直接呼ぶことの禁忌もある。他人が自分のトーテムに対して傷害、殺食の場合、抗議すると同時に報復するので、族間の衝突の起因になることもある。自族の成員が禁忌を犯した場合、罰を受けなければならない。部族個人が不幸になるだけでなく、全部族が災禍に遭う事態になることを恐れている。

時代が下っていくと、人が動物、植物と自然現象の認識が高められることで、自然生態に対する恐怖が徐々に薄れ、多くの事態現象に対し人間が支配できると考えるようになった。また人口の増加により、食物不足の状況に迫れば、禁忌文化も緩和され、厳しく守られなくなり、トーテム禁忌意識が変化するのである。しかし現実的に完全にその信仰を取り除き回避することは極めて困難である。チベット族の場合、トーテム崇拜に加えて仏教の信仰が生活に浸透する中、一部地域現代化の産業開発に、商品を市場へ出荷することで、困難な壁に直面せざるを得ないのである。ここで阿坝州に隣接する青海省玉樹州の実例に触れて見よう。

ここでは、同じチベット族の居住区の玉樹州書記吳徳軍氏が2019年に受けた取材記事（注10）

の内容に注視したい。記事には前述触れた生態環境の保護政策、牧草地の保護と有効管理政策の実施、家畜飼養頭数の合理化などについての説明があり、伝統文化トーテム信仰との問題点に関しても触れている。内容に重要視したいのは、これまで述べてきたチベット族の伝統文化信仰としてのトーテム禁忌に対し牧民たちは強く意識しているし、その上宗教的に殺生する禁忌も根強く残っているので、産業化するための合作社経営では、これら牧民たちが抱くトーテム宗教信仰・伝統文化の高い壁を打ち破らなければ、食肉産業の生産と物流販売が成立できない点である。ここで政府側から、脱貧政策を実施するにおいて、すでに「精神扶貧」という政策理念が考慮され、貧困対象である庶民の実際の文化思想の状況、精神的需要を理解した上、満足させることが重視されている。実生活で脱貧困の補助方法において、様々な物質扶助と別に、精神の面で重要な補助理念として使わなければならないと考えている。まず牧民たちが理解できるように事情説明を行いながら、牛の出荷と殺生することを納得させ、同意するのである。ヤクは自分たちの神聖なトーテムではあるがベットではないのである。これから自分たちの生活を貧困から脱出させるためには、多数の家畜を飼養し、それが重要な生活の資源になることを説得する必要がある。牧民自身も合作社の一員であるし、生活と産業が一体化する中、経営が順調になれば、産業化の成果と利益が具体化され、牧民に実感できるであろう。また殺生について、強い宗教の信念を打破することは、かなり困難な現実がつきまとう。そこで解消法として、地方の郷長は自ら牧民たちにに対し、もし出荷と殺生の罪に関わることが生じたのであれば、自ら全ての責任を持つと牧民に保証して説得する事例もあったのである。

玉樹州の実例から、脱貧困のために現代化を推進するには、様々な地域の生態、文化の地域性に応じて、地域の住民たちが貧困の実態に根本的な問題を認識し、物質的、精神的ともに積極的に取り込む姿勢と理解がなければ、本当の現代化を持続して進めることは困難である。

結 語

今回広範囲な多民族の地域にフィールド調査を行ったのだが、貧困から脱出することに、自分たちの生活基盤としての自然資源を利用して、さらに産業化と市場化へ進化させ、既存の資源を極力有利に開発しながら、最新の技術を使い、良い成果をもたらす努力をすれば、ある程度のよい成果を得られるのであろう。

長い歴史経験を積み重ね、少数民族地域に実在している現実問題の多くは、後進的生業形態に関連するあらゆる分野に存在している。それぞれ欠陥点が明確であり、具体的改善法を提示し、科学的論理と先進技術を合理的に遂行すれば、改善策による不適応と違和感に由来する問題の解消は、それほど困難ではないのである。なぜなら「脱貧困」の目標さえ達成できれば、その後自分たちの生活は、現実的に改善が実感でき、具体的な形で利益を得られるからである。

少数民族は、それぞれ長い歳月に蓄積されてきた伝統文化が、各自意識的潜在的にまたは顕著な形で保有されている。そこで現代化と自族伝統文化の存続について、本論では事例を通して、



(写真8) ルグ湖イ族の小学校プミ双語教育クラスがある

雲南寧蒗彝族自治州永寧郷ルグ湖の希望小学校に、プミ双語教育クラスが設置されている（写真）。現代化には「共通語」の普及が必要と同時に、民族伝統文化の伝承も重要視すべき理念の実行である。教育を受ける側にとって、民族文化の維持と保存に矛盾がなく、相互性を持って、有利かつ前進的現代化実施の一例であると考えられよう。

さて、「脱貧困」を実現する前提において、合理的に進めるためには、生活全般に現代化を取り込む必要がある。実際各民族の自然生態、地理条件、歴史文化、宗教信仰と社会構造に相違性があり、それぞれの現代化へ取り込む過程と実態では、対応策にはかなりの多様性を求められている。この点に関して、本論前半に取りあげたルグ湖地区の実態において、自民族の伝統工芸文化を地域住民に伝授しながら、製品を商品化し、市場開拓と参入へ積極的な姿勢と努力を重ねてきた。伝統文化の保存に強い意志で守り、現代社会の先進な経済、工業と社会のシステムを順応しながら、伝統文化を活かす形で伝承することを目指している。だが、それと対照的に、後半に触れたチベット族地区の牧民が、その現代化する過程に、数千年にわたって続いてきた伝統信仰トートেমの信念を薄め、回避すると同時に、産業化利益を獲得する目的を優先する考えを重要視することで、妥協しなければならない厳しい現実もある。当然そこで政策実行側の努力と工夫が適切で説得力があることは重要で、全力で扶助する姿勢は欠かせないことが要求される。

現代化という大きな理念と現実が交差する中、伝統文化信仰の保存と伝承、或いはそれを保護と回避の選択が多方面において生じるであろう。これは民族文化の深層に関わる難しい現実問題で、解決策も多樣的であり、是非の判断と答えが難しいことも否定できないのである。現在も将来も様々な地域において、現代化を目指すと同時に、少数民族自身で考え、あらゆる形で問題に直面し、決断していかなければならない課題が続くであろうと考える。

注

注1 「食文化における中国少数民族現代化の諸問題について—母系社会納西族摩梭人を中心として—」

筑紫女学園大学紀要第16号 2004年1月

注2 2019中国社会责任公益盛典 第十二届中国企业社会责任峰会 NEWS 新华网を参照。

問題点を取りあげ見てきた。

一般論として、少数民族が最も尊重する伝統文化に対し、概ね維持かつ伝承すべきものだと考えられる。その点に関連して、現代化の推進に、伝統文化を伝承するには、最も基盤であるのは教育事業だ。多方面に人材を育成し、庶民教養と意識をレベルアップすることが重要不可欠である。今回の調査中、

http://www.xinhuanet.com/local/2019-08/06/c_1124843618.htm (2020年2月20日アクセス)

注3 「泸沽湖景区去年游客突破百万人次」 雲南日報 2018年1月7日記事 雲南政府サイトを参照。

http://www.yn.gov.cn/yngk/lyyn/lydt/201801/t20180107_152106.html (2020年2月15日アクセス)

注4 「非物質文化遺産」(intangible cultural heritage)は「無形文化遺産」である。

注5 「支付宝」は中国アリババグループが提供する(Alipay)アリペイで、中国だけではなくアジア各国に2019年6月で10億人以上の本人認証済みアクティブユーザーを抱え、世界450以上の金融機関パートナーがある。日本は2015年以来インバウンド施策で多くの店舗に導入され、2019年6月時点で30万店になった。「微信」はWeChat、中国の騰訊(Tencent)が開発したスマートフォン向けのコミュニケーションアプリの名称である。2011年から提供を開始し、ウィーチャットペイとして電子決済もできる。

注6 世界トイレ組織(World Toilet Organization, 略称“WTO”)、2001年11月19日シンガポールで成立、国際非政府組織。2013年7月、193国の承認で、国連がこの日を「国連世界トイレの日」と設定されたのである。

注7 牦牛咋变“金牛”——一位四川高原藏区基层畜牧师的扶贫思考 新华社 成都2019年9月15日を参照。

注8 「四川チベットヤク産業昇級牧民収入増を補助」 新華社 周向吉 2019年7月9日を参照。

注9 「牦牛」(牛科属動物)“科普中国”李湘涛 審査 (北京自然博物館)を参照。

<https://baike.baidu.com/item/%E7%89%A6%E7%89%9B/262319>

注10 《問答神州》(香港鳳凰衛視)「脱貧攻堅」テーマ「問答玉树州委书记吴德军」のインタビュー記事の内容を参照。<http://www.yushunews.com/system/2019/11/05/013008834.shtml> 玉树新聞網 (2020年2月20日アクセス)

主な参考文献

- ・《丽江市宁蒗县泸沽湖流域控制性环境总体规划》云南省城乡规划设计研究院(云南省城乡规划设计研究院勘测分院罗志光工作室) <http://www.yncityplan.com> (2020年2月20日アクセス)
- ・(四川省)阿坝州2018年国民经济和社会发展统计公报 (阿坝州政府サイト 2019年5月10日) <http://www.ahmhxc.com/tongjigongbao/14425.html>
- ・农业部介绍农村集体产权制度改革有关情况 中国政府网 (2020年2月19日アクセス) http://www.gov.cn/xinwen/2017-01/03/content_5156007.htm#1
- ・中共中央 国务院关于稳步推进农村集体产权制度改革的意见 (2016年12月29日 新华社)
- ・「阿坝州概况」中央政府门户网站 www.gov.cn (四川省阿坝州政府サイト 2008年05月13日)
- ・稻城亚丁:旅游景区“厕所革命”从中国走向世界 (四川日報 2018年11月20日) <https://sichuan.scol.com.cn/ggxw/201811/56683394.html>
- ・四川省阿坝州创新扶贫产品销售体系 http://www.agri.cn/zx/xxlb/sc/201912/t20191224_7269446.htm

(中国農業の農村信息网 阿坝州政府サイト 2019年12月24日)

- ・中国農村の土地制度と土地流動化 河原昌一郎 農林水産政策研究所 (平成28年10月18日研究成果報告会)
- ・中国農地法制変革と持続可能な発展 陳小君講演 文元春訳 2017
(「持続可能社会における所有権概念」研究会 早稲田大学法学部, 比較法研究所共催)
- ・中原文物 第1・4号75~78号 (1996中原文物編集部)
- ・藏族传统文化辞典 谢启昆著 甘肅人民出版社 1993
- ・图腾与中国文化 何星亮著 江苏人民出版社 2008
- ・龍族的圖騰 何星亮著 台灣中華書局 1993
- ・云南省社会科学 云南人民出版社 1989
- ・解码西藏文明 - 生命禁区的生命奇迹 尕藏才旦著 Beijing Book Co. Inc. 2016
- ・中国图腾文化 何星亮著 中国社会科学出版社 1992
- ・图腾文化与人类诸文化的起源 何星亮著 中國文联出版公司 1991
- ・青藏高原游牧文化 尕藏才旦 格桑本著 甘肅民族出版社 2000
- ・藏族纳西族普米族的藏传佛教 / 云南宗教文化研究 杨学政著 云南人民出版社 1994
- ・《喜马拉雅城市与建筑文化遗产丛书》~江孜城市与建筑 汪永平 沈芳著 Beijing Book Co. Inc. 2017
- ・「关于普米语传承班双语教育目前状况及策略」才让卓玛 王安娥 著 (优质论文网)
<http://www.udooo.com/zzjylw/lwfw15926.html> (2020年3月1日アクセス)

(本研究は2019年筑紫女学園大学個人研究助成による成果の一部である)

(セキ キリン: アジア文化学科 教授)

中国少数民族における現代化問題の研究 ～雲南、四川地域を中心として～

石 其 琳

Research on the Problem of Modernization in Chinese Minority Groups :
Focusing on the Yunnan and Sichuan Provinces

Kilin SEKI

筑紫女学園大学
人 間 文 化 研 究 所 年 報
第31号
2020年

ANNUAL REPORT
of
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE
Chikushi Jogakuen University
No. 31
2020